

## 『散文ランスロ』における副詞-mentの位置と用法

伊藤了子

## 0. はじめに

現代フランス語では副詞の位置がその働き（意味）に大きく関わることもある。

1.a. Ce poème n'est pas franchement [=tout à fait] mauvais.

b. Pierre a parlé franchement [=de manière franche].

c. Franchement [Pour parler en toute franchise],  
ce poème n'est pas mauvais. (RIEGEL 1994)

1.a.のfranchementは形容詞によって表わされる属性の程度, b.は事行parlerの様態, c.は発話者の発話態度(モダリティ)を示している。しかし, すべての副詞(句)がこのようにいくつかの価値を持つことができるわけではなく, たとえば probablement のように, それが占める位置の如何にかかわらず意味が安定しているものもあれば, lentementのように事行の展開の様相を表わすものとしてしか機能せず, したがってその位置も無標のばあい動詞の右に安定しているものもある。

事行の展開の様相を表わすというその役割から, 古仏語においても様態補語の位置は動詞の右が一般的であるはずなのに, 2のように動詞の左にすることが, 時としてある。

## 2. Hastivement s'en retorna (Melion v.211)

これは韻文の例である。そこで, 散文でも同様の例が存在するのか, また, 位置と役割との間に相関関係が存在するのかを以下に調査する。

まず、副詞の上記3機能のうち、1.b.様態補語と1.c.モダリティの定義を簡単におこなう(1)。次に『散文ランスロ』(第1巻の最初の50頁)にはどのようなモダリティ表現があり、それは文の中でどのような位置付けが可能かを見る(2)。さらに、調査範囲の副詞*-ment*をすべて取り出し、その位置および、共に用いられている動詞の確認を行なった後、必要に応じて『散文トリストラン』(第1巻の最初の50頁)の例と比較しながら、位置と役割との相関関係を検討する(3)。

## 1. 様態補語とモダリティ

様態補語に関しては曾我(1992)を、モダリティに関しては増岡(1991)を参考にする。

様態補語は「事行の展開の様相、段階に関わる」(p.44)そして「一般に発話者は、様態補語を動詞に近い位置(特に動詞の直後)に置く傾向がある」(p.45)。

増岡(1991)は次のように述べている。まず「文」は、客観的に把握される事柄を示す要素と、主観的な判断・表現態度を示す要素という2大要素から構成される(p.31)。そして広義のモダリティは「判断し、表現する主体に直接関わる事柄を表わす形式」(p.30)である。より厳密には、「表現者の表現時での判断・表現態度を表わす要素であると規定される。モダリティとは、...、主観性の言語化されたものである。したがって表現者自身の判断・表現態度でなければならない。また、表現時での判断・表現態度でなければならない。」(p.35) 後者に従えば、『散文ランスロ』のような物語の場合、「表現者」とは、語り手でしかあり得ないが、本稿では増岡の広義のモダリティの定義を採用し、時には語り手、時には登場人物と考える。

## 2. 『散文ランスロ』におけるモダリティ表現

『散文ランスロ』における明らかなモダリティ表現としては、1.certes,

2. 非人称表現 *Il est voir que* , (*Il*) *m'estre avis que* ..., 3.

その他: *Dieu merci* 等が挙げられる.

2. 1. *certes*: *certes*は登場人物の台詞の中でのみ用いられている.

4. *Certes se il valsist tant que je le poisse contrepeser a  
tos les chastials del monde, n'en fuisse je ja plus  
corociés que j'en sui ore.* (Lanc.II.19.5)

5. " *Certes, bials dols amis, fet Galehout, je le savoie  
bien des pieca, mais je nel vos osoie dire,  
(Lanc.IV.2.13)*

文型: 1.*certes* + *X1* + *V* + *Xn* (2例) *X1*=節

2.*certes* + 挿入句 + *X1* + *V* + *Xn* (9例)

*X1*=*Sn*・*Sp*, その他 (*a merveille, bien*)

『散文トリスタン』に関しても, ほぼ同じような結果が得られる.

文型: 1.*Certes* + *X1* + *V* + *Xn* (1例) *X1*=*Sp*

2.*Certes* + 挿入句(節) + *X1* + *V* + *Xn* (10例)

3.文中 (1例)

6. *Mout fustes ore certes gent esbahie, ki avoec vous nel  
retenistes pour lui faire feste et hounour.* (Tr,I.40.25)

6の*certes*は《=assurément》の意味で断定を強調する役目を果たしている  
ので, 句点なしで文中にあっても, 発話者の主観と結び付き, 事柄の外にある  
といえる.

以上により, *certes*が文の外の要素であると意識されていることが明らかで  
ある.

2. 2. 非人称表現: *Il est voirs que* は *QUE Q* が真であるという発  
話者(登場人物)の判断を示している.

7. *Il est voirs, et vos n'en dotes mie, que j'ai maintes  
choses fetes por vos que l'en m'a atornees plus a honte*

qu'a honor et plus a folie que a savoir.(Lanc.IV.7.4)

これらの表現と密接な関係にある *certainement*, *voirement*, *seurement* に関しては次章で検討する。

(Il) m'estre avis que (5例) は QUE Q が発話者の判断であることを示している。

2. 3. その他: Dieu merci (2例) は事柄が発話者にとって好ましいものであることを表わすという意味で発話者の主観と直接関わっていると言える。

8. et combien que j'aie este essilie et deseritee, Dieu merci or sui a m'onor et a mon eritage revenue:

(Lanc.III.9.9)

9. Ensint a ma dame este longuement en chaitivoison et cil qui avec li estoient, tant que Dieu merci or l'ont recovree si baron et rendue li ont sa terre et son heritage.(Lanc.III.16.1)

9は従節中であるが、この表現はどの位置にあっても発話者の態度を表明するものである。

### 3. 『散文ランスロ』における副詞-mentの位置と役割

#### 3. 1. 動詞と副詞-mentの位置

( ) 内の数字は例の数を、数字の横の\*は従属節中であること、下線はその副詞が動詞の左に位置する例が存在することを示す。

10.	動詞の右 (43,14*)	動詞の左(6,2*)
1) <u>apertement</u> :	voir(1)	-
	[=clairement]	
2) <u>autrement</u> :	-	tenir(1)
3) <u>belement</u> :	aler(1), chevalcher(1)	-
	[=sans faire du bruit]	
4) <u>certainement</u> :	savoir(1, 1*)	-
5) <u>chierement</u> :	comperer 《=payer》(1*)	-
6) <u>cortement</u> :	durer(1)	-

- 7) debonairement: soffrir(1\*) -
- 8) delivrement: faire(1) -
- 9) desevrement: departir(1\*) -  
[=séparément]
- 10) droitement: venir(1) -
- 11) durement: ferir(1), voler (1), -  
plaindre (se) (2),  
plorer (2), serrer (1),  
sospirer (1),  
merveillier (se) (1),  
estre chargies (1),  
estre corocies (1\*),
- 12) espessement: branchir(1), jonchir (1\*) -
- 13) estranement: - merveillier(se)(1)
- 14) felenesement: cheoir (1) meschaoir(1)
- 15) fierement: venir (1), dire (1) parler(1\*)
- 16) isnelement: penser (1), envoyer (1) -
- 17) laidement: decevoir «=tromper» (1) -  
[d'une manière désagréable(Dic.Hist)]
- 18) legierement: trover (1) -  
[=facilement]
- 19) longuement: parler (3), demorer(2), celer(1)  
tenir (1),  
estre en chaitivoison (1),  
avoir la compaignie (1),  
gesir (1), mener (1\*),  
penser (1\*), soffrir (1\*),
- 20) (des)loialement: faire (1), mener (1\*), -  
sacrer (1\*)
- 21) malvaisement: voir (1\*) -
- 22) novelement: fermer (1), recevoir (1) -
- 23) premierement: clamer (1), parler(1) dire(1)  
deviser «=raconter» (1)
- 24) prochainement: faire (1\*) -
- 25) richement: marier (1) -
- 26) seurement: pooir (1) -
- 27) vraiment: savoir(1\*) dire(1)  
aidier(1\*)

### 3.2. 副詞-ment の働き

ここでは、上記の副詞-mentのうち、動詞の右に位置し (v+-ment) 明ら

かに様態補語として用いられているもの（大多数）は扱わない。動詞の左に位置するもの、あるいは動詞の右にあっても様態補語以外の用法の可能性のあるもののみを検討する。

### 3.2.1. 動詞の左に位置するもの

#### **autrement:**

11. vos savez bien que vos me jurastes sor sains que vos  
me diriés la verité de quanque vos troveriés sans riens  
celer. Ensint com vos le jurastes, si vos en aquites et  
li un et li autre, ou autrement je vos tendroie tos  
parjures. (Lanc.IV.21.4)

*autrement*は事行の様態補語《*d'une autre façon*》としての意味も存在するが、ここでは「*tenir*みなす」の様態補語としてではなく、明らかに*ou*と共に《*sinon*》の意味で機能している。つまり「そうでなければ、それ以外のやり方では」という意味で前文を受けた上で、後続文との関係を示している。人称主語代名詞*je*が*X1*の位置を占めていることによって、この用法の*autrement*が*X1-V-X*の内部の要素であるとは意識されていないことがわかる。

#### **novement, prochainement**

これらは、「事行の展開の様相、段階」という様態補語の定義には当てはまらない。むしろ時の状況補語と考えられる。

#### **premierement**

*premierement* は事行あるいは事柄の発生する順序を表わす。様態補語でもモダリティでもない。また、どの位置でも意味は変わらない。

#### **estrangement**

14. mes estrangement se merveillent li rendu de lor seignor  
qui si vient seul: (Lanc.II.23.5)

*estrangement*には《*étrangement*「奇妙な方法で」》という様態の意味と《*extraordinairement*「並外れて、非常に」》という程度の意味とがあっ

た (Greimas, Godefroy). 例14では後者の意味で用いられている. 14が「(発話者〔語り手〕)にとって不思議なことに、修道士たちは驚いた(驚くはずがないのに、驚いた)」という意味でないことは、後続の関係代名詞節が、修道士たちの驚きの原因(当時の一般的慣習に反する出来事)を述べるものであることから、明らかである<sup>(1)</sup>.

#### **felenesement**

15. 《Ha, Diex, tant felenesement me commence a meschaoir》  
(Lanc.II.18.4)

このfelenesementは文脈から《cruellement, impitoyablement, gravement, violemment》等の解釈が可能である. tantは前方照応「それほど」であって、felenesementにかかり、felenesementは、動詞commencerではなくmeschaoir 《=arriver malheur》にかかっている. しかしtantとfelenesementは分離可能であるので、前方照応的tantの存在はfelenesementが動詞の左に位置することの必然的な条件にはならない. ここでは明らかにすることはできないが、別の理由が存在するはずである.

#### **fierement**

- 16.a. et vint devant le roi molt fierement, la ou il seoit  
entre ses chevaliers. (Lanc.III.1.7)  
b. et dist molt fierement: (Lanc.III.2.7)  
c. Li roi regarde la pucele qui si fierement parole,  
(Lanc.III,4,14)<sup>(2)</sup>

動詞の右のa.b.も左のc.も《d'une manière orgueilleuse》の意味であり、位置とは無関係に様態補語として機能していることが明らかである. ただし調査範囲では主節の動詞の左(=x1)の例は存在しない.

#### **longuement:**

12. Mais longuement ne li pot estre celé, (Lanc.IV.1.6)

longuementは何にかかるのか、可能性としては2通り考えられる. 「estre



**celé longuement** 長い間隠されていること、が不可能であった」「**estre celé** 隠されていること、が長い間不可能であった」ここでは、文脈から「（そのことは）長くは彼女に対し隠され得なかった、隠しおおせなかった」という意味であることが明らかである。つまり、**longuement**は**estre celé**にかかるのであって、**pot**にではない。状況補語の役割を、事柄の時間的、空間的枠組みと考えるなら、この**longuement**は状況補語ではなく、**estre celé**の様態を表わす補語であると考えられる<sup>(3)</sup>。

**voirement**: 次章で、**certainement**、**seurement**とともに検討する。

以上の、動詞の左に位置する副詞-mentは大きく3つのグループに分類できる。1. 様態補語でもモダリティでもない (**autrement**, **premierement**, **nouvelement**, **prochainement**)、2. 位置にかかわらず様態補語 (**fieurement**, **felenesement**, **longuement**)、3. 「程度」を表わす (**estrangement**)。

3. 2. 2. 動詞の右にありながら、様態補語以外の役割の可能性を有するものの

**certainement**, **seurement**, **voirment** に関して、上記モダリティ表現 **certes**や**Il est voir que** との関係から検討する。

**certainement**

17. **et si ne sai pas certainement li quels est venus li uns de l'autre, ou la poors del malage, ou li malages de la poor** (Lanc.IV.13.3):

18. **ne jamais ne serai a aise devant ce que je sache certainement que ce senefie**, (Lanc.II.10.13)

**certainement** は17,18ともに様態補語 《=de façon certaine》として機能している。《**Il est certain que ...**》あるいは《**bien sûr**》の意味ではない。

**certainement**は『散文ランスロ』には上記2例しか見られなかったが、『散



文トリスタン』には非常に多い(33例)。そのすべてが動詞の右に位置する。うち17例は*sachiez*と共に用いられている。

19. *or sachiés (tout) certainement que ...* (Tr.I-5-20)

*sachiez* (命令) は《*Il est certain que*》とも、断定の強調《*as-surément*》とも共起しない。《*savoir, de façon certaine*「確かな知識を持つ」》であると考えられる。また、命令以外の*savoir* 6例に関しても文脈から、*certainement*が様態補語として機能していることがわかる<sup>(4)</sup>。

20. *quant ele est apareillie et montee et si esquir sont monté, ele vient tot esranment a celui a la Cote Mautaille, ki ja estoit armés et montés et avoit dit a soi meïsmes que a cestui point n'atendraoit il point la Damoisele M., car puis k'il savoit certainement quel part il doit aler, il n'avoit cure de dame ne de damoisele amener en sa compaignie a ceste fois.* (Tr.I.41.19)

しかし、21は少し異なる。《*Il est certain que*》という判断のモダリティである。*au commencement/mais orendroit*の対立がその標識となっている。

21. *Au commencement de la bataille, quant il senti que Lancelos aloit sour lui jetant les caus si grant et si pensans com s'il ississent de la main d'un gaiant, quidoit il bien certainement que ceste force li passast et qu'ele ne durast mais se petit non. Mais orendroit l'a il tant esprouvé et assaié k'il ...* (Tr.I.11.27)

*certainement*に関しては、結局、調査範囲における*x1*の位置の例はゼロであり、1例を除いてすべて、事行*savoir*の様態補語として機能している。

さらに、*certainement*の様態補語としての用法の裏付けとして『アーサー

王の死』という作品の中の例を参考にする。certainement 7 例中, savoir 4 例, dire 3 例。6 例が動詞の右, 1 例が左に位置する。

22. 《Sire, par mon chief, cil chevaliers a ces armes  
vermeilles qui ... n'est pas li chevaliers que ge  
cuidoie; einz est uns autres, certainement le vos di;  
(La Mort, 19.15)

7 例とも certainement は様態補語, 《savoir, de façon certaine》あるいは《dire, avec certitude》である。動詞の右でも左でも様態補語として機能していたということは, certainement が意味的に安定していたことを伺わせるものである。そして, 例外は 21 のように有標のばあいである。

#### seurement

23. et tant me devez vos bien conoistre c'onques mes cuers  
n'ot por perte de terre ne por gaaing haute joie ne  
grant dolor: si poes ore dire seurement quele est  
la perte, (Lanc.II.26.10)

この pouvoir は「許可」の意味で機能している。seurement は dire にかかる (《=d'une façon sûre》) のではなく, むしろ poes にかかる, つまり, 発話者が「許可」を受け合っていると解釈するほうが自然であろう。つまり, seurement 《=Il est sûr que, assurément》で, モダリテイとして機能しているといえる。

#### voirement

voirement の機能に関して, 可能性としては, 例 1 の franchement 同様, 形容詞・副詞の強調, 様態, モダリテイの 3 つが考えられる。次の 3 例は, 強調でないことは一見して明らかであるが, 様態 《conformément à la vérité extérieure》か, モダリテイ 《sans aucun doute, assurément》か?

24. et cil qui contredire le voldra soit autretels que il  
sache bien vraiment ce dont il voldra fere deffense,  
(Lanc.III.17.10)

25. 《Bials doz compains, bials doz amis, se vos saviés com de grant fierté il fu commenciés, **voirement** le diriés vos. (Lanc.II.14.8)
26. Mais por ce ne di je mie, que **si voirement** m'aït Diex je ne fis onques rien por vos que je ne tiegne a honor et a gaaing, (Lanc.IV.7.6)

24は「真に知っている」という意味であるから様態補語, 25《=sans aucun doute》, 26《=assurément》はモダリテイであろう。si m'aït Diex はこの表現自体, 断言に先行し, 断言を強めるものである。26のばあい, さらに voirement がそれを強めている。

様態補語としての用法に関しては『トリスタン』の中にも1例見られる。

27. Neronneus, fait il(Lanselos), je me recort orendroit d'une parole que vous me desistes anuit au venir, car vous me desistes que vous aviés cestui castel gaaingnié par une seule lanche. ---Sire, fait Neronneus, **ce est voirs**. Je le vous dis **voirement** et encore le vous di je bien. Et se vous volés savoir conment ce fu, je le vous conterai **mout bien**. (Tr.I.18.6)

「私は**確かに**そう言った, そしてもう一度私はそう言う」という意味ではなく, 「それを**ありのままに**言った(=事実を述べた)」と解釈できる。また, certainement 同様, sachiés (命令) と共に用いられて「**QUE Q** を事実として(=ありのままに)知る」という例もある(7例)。28は, 表現全体としては, 断定の強調というモダリテイの機能をはたしている。

28. Or **sachiés (tout) vraiment** que ... (Tr.16.15)

certes/certainementは基本的に役割が異なり, 位置もそれぞれ安定しているのに対し, seurementやvoirementは関係する動詞の語彙的要素や位置

と複雑に作用し合って時には様態補語として、時にはモダリティとして機能するようである。

#### 4. まとめ

現代フランス語同様、これら13世紀の散文テキストにおいても、モダリティは「文」の外の要素である。そのことは、句点による区切り表示がないので現代フランス語ほど明確ではないが、意味が安定している副詞（句）に関しては、文頭、文中、文末のいずれにも位置することが可能である。

事行と密接な関係にある様態補語としての副詞*-ment*の位置は、現代フランス語と同じように一般に動詞の右隣りであるが、様態補語として意味の安定しているものは時として動詞の左に位置することがある。換言すれば、x1の位置にあっても、様態補語として機能している副詞*-ment*が存在する。そして、この現象は主節と同様従属節においてもみられる。

様態補語の副詞*-ment*がx1の位置を占める時の条件や効果があるとすればそれは何かに関しては本稿で明らかにすることができなかった。x1の位置を占める他の要素全体を見渡した上で考察する必要があるであろう。また、*voirement*の機能についてもさらに緻密な分析が要求される。

注:(1) *merveillier(se)*が*estragnement*によって驚きの強さ、大きさを表現する例は他の作品にも見られる。他に、*ferment*や*molt*によっても表わされる。

-Si s'esmerveille estraignement. (Fregus, p.17, Michel in Godefroy)

(2) Messire Gauvains entent cele qui si fierement s'escondit, ... (Concordance, La Mort Artu)

- (3) 長い期間(時間)を表わす状況補語としては *long tens* という表現がある。(Concordance, Mort Artu)
- (4) *savoir certainement*: Tr.I.42.3, I.14,19, I.15.20.  
I.17.39, I.19.7, I.24.26, I.21.43.

テキストおよび主要参考文献

- Lancelot, Roman en prose du XIII<sup>e</sup> siècle: Edition critique  
avec introduction et notes par ALEXANDRE MICHA, TOME  
I. Droz 1978, Paris-Genève
- Le roman de Tristan en prose: Tome I, Edité par Philippe  
MENARD, Droz, 1987, Genève
- Les lais anonymes des XII<sup>e</sup> et XIII<sup>e</sup> siècles: Edition critique  
de quelques lais bretons par P.M. O'Hara TOBIN, Droz,  
1976, Genève
- P.KUNSTAMANN, M. DUBE: Concordance analytique de LA MORT LE  
ROI ARTU, Editions de l'Université d'Ottawa, Ottawa,  
Canada, 1982
- F.GODEFROY(1961): Dictionnaire de l'ancienne langue  
française et de tous ses dialectes du IX<sup>e</sup> siècle,  
Paris 1888 reprinted by SCIENTIFIQUE REPRODICALS  
ESTABLISHMENT, VADUZ, LIECHTENSTEIN
- M.RIEGEL/ J-C.PELLAT /R.RIOUL (1994): Grammaire méthodique  
du français, PUF
- 益岡隆志(1991): 「モダリティの文法」くろしお出版
- 曾我祐典(1992): 「フランス語における状況の表現法」白水社
- 泉 邦寿(1989): 「フランス語, 意味の散策」大修館

(文学部助教授)